

# 明治の佐伯三青年 (22)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

## 御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

### 藤田と「国会論」

この頃の藤田は、各新聞社が連日とりあげる民権運動の社説に、競争意識をもって頭を痛めていたが、京橋の自宅に帰ると、昨年生まれの長男敏夫をあやすのが唯一つの楽しみであった。だが、今日はかりは、敏夫をあやしながらも福沢の急用が頭にこびりついていた。

藤田は翌朝箕浦と連れ立って、早速福沢を三田に訪ねた。福沢は相変らずにこにこしながら、二人に呼び出してわるかったことわりながら、どっかと椅子に腰を下ろした。

「近頃、各社の競争もはげしくなつたろう」

福沢はこう言いながら、机の引

き出しから一通の原稿をとり出して二人の前に出した。見出しには「国会論」とあった。

藤田と箕浦はこれを見てあっと息をのむ思いだった。報知の論説陣が一番悩み続けていた立場を見通しての提案であった。藤田は流石にさすが恩師だけのことはあると、おし載いて福沢の眼を見た。福沢は大きく頷いた。

「此論説は新聞の社説として出されるなら出して見なさい。屹と世界の人が悦ぶに違ひない。但し此草稿のまゝに印刷すると文章の癖が見えて福沢の筆と云うことが分るから、文章の趣旨は無論、字句までも草稿の通りにして、唯意味のない妨げにならぬ処をお前達の思ふ通りに直して、試みに出して御覧、世間で何と受けるか面白いではないか」

と云うと、年の若い元気の宜い藤田箕浦だから大いに悦んで草稿を持って帰って、早速報知新聞の社説に載せました。

以上は、「福翁自伝」に書かれている原文であるが、当時の状況を彷彿とさせるものがある。

新聞の社説に窮していた二人は、小躍りする程嬉しかったに違いない。社説は、この年の七月二十九日から八

月十日に及んで連載された。

ついでに、「福翁自伝」をもう少し続けることにする。

「藤田の書き方は結論が早く、二三日に互って論ずべき議論を一日で切り上げてしまふといふ風であり、箕浦の方は自分のいふた言葉を一字一句其通りに記し、よく論旨をつくしている」

これが福沢の兩人に対する文章評であるが、ここにもよく兩人の性格が現われている。

福沢は、この国会論で「我侪の国会論に於ける、数年以来固く執りて変ぜざるの説なり。当初其論題の初めて社会に現はるるに当てや、我侪亦其主唱者の一人たるを自信するなり」と、緒言で国会開設論者としての姿勢をうち出している。この国会論の論説が、今までの土族中心の自由民権運動から、一般大衆の運動と発展するこの時期に発表されたことは時宜を待っていた。福沢自身、本人が驚く程の反響があったと述懐している。

藤田や箕浦は、恩師の後援もあって、報知の面目を施すことも出来た。余りの反響に、この論説は、早速藤田箕浦兩人の名で単行本として出版された。

そんなある日、ひょっこり小西社長が社に顔を出した。「これはお珍しい」

藤田も一瞬とまどっている様子だった。

それもそのはず、この小西社長は、社の経営だけ当り編集その他は一切藤田に任せ、会社にはめったに顔を出さなかったからである。

「いやあー、記者志望の青年の就職を頼まれてのう」

社長はこう言いながら椅子を寄せた。

「それは又。どのような若者でござろうか」

藤田も筆を止めて社長に向き直った。

「何でも司法省の法学校を放校になったらしい。南部藩の出身しい。勇ましいのはいゝが、権大書記官中井弘の依頼とあっては知らぬ顔も出来ぬでのう」

と、社長は事情を説明した。

「中井と申されると、あの文人桜州山人」

藤田は問い返した。

「その通り。奴とは親しくてのう。一人位何とかならぬか」

社長は顎に手をやって考えるふうであった。

「何か特徴でもありますか」

「フランス語を少々やっているらしい」

「ならば役に立ちましょう」

「そうか引き受けてくれるか」

藤田はその青年がフランス語を学んでいると聞き、腹案があった。そして、青年の就職は即座に決まった。

この青年が、のちに平民宰相となる原敬である。藤田は、横浜で発行されていたフランス新聞から、日本に關係する記事を拾い出してこの原に翻訳させた。

この明治十二年という年は、士族中心の自由民権運動が国民的な運動へと發展する画期的な年であった。前に書いた県議路線が、十月には結集の用意として、「国会開設認可懇請の爲同議者同盟懇望案」を発表して、明年五月十三日を期して、東京に集合するよう全国に呼びかけた。学者や士族の予期し得なかつた民衆の組織化が、平民―豪農、豪商―県議の線を通して、自然に力を蓄えつつあった。又この春第二回大会を開いた愛国社も、第三回大会を計画中であり、朝野を問わず、有識者の間では、憲法の形式についても研究されるまでに至っていた三田派の有志が集まって談合した交詢社もそのためのも

のであり、交詢社は日本の最初のクラブ組織となつた。

この頃の藤田は、官界に入った矢野からは政府の情報を得、福沢の後援もあって、少しは精神的なゆとりも出ていた。家庭は一切豊吉に任せ、自然に交友関係も広がらなくなって登樓の機会が多くなっていた。

報知の主筆といつても、まだ弱冠二十八歳である。齒に衣をきせぬ藤田の言語や挙動には、好感をよせる者も多い反面、反感をもつ者もあった。仕事柄とはいへ、黒塗りの自家用車を走らせて宴席を廻る姿は、よそめには慢心ととられても仕方がなかつた。年来の酒好きと、上京以来の苦言からの解放感がそうさせたのかもしれない。噂を心配した福沢は、「国会論」の単行本を届けにきた藤田を呼びとめた。

「藤田。近頃余りよくない噂を聞くが、余りはでに動き廻るな。それから体のためにも少し酒をつつしむ方がいい」

「はい」

藤田は神妙な顔をしていたが、内心では、「なに、やることはやっているではないか」という自信があつた。

だが、恩師が木綿の着物を着ているのに、叱られている自分が、羽二重の絹物をまわっているのでは、ばつがわるかった。

藤田は早々に福沢邸を引きあげたが、藤田の不評は酒の上のことが多かった。弱冠の身分不相応は、ねたみもあったが、「栗本御大を下におくとか、恩師の福沢を批評する」というのが一番苦手だった。

栗本鋤雲はすでに老齢で思想を超越していた。悠悠自適の生活は、藤田等の弱輩とすでに次元を異にしていたが、福沢はまだ現役の先覚者である。藤田にとって、福沢の思想を受けつぎながら、その行動は又別問題であった。

福沢は、西南戦争の時には、塾の中津士族に建白書を出させ、大久保暗殺の「民間雑誌の社説」が警告されると、直ちに雑誌を廃刊にした。そして、一連の「通俗国権論」「通俗民権論」「国会論」では、民意を結合させて爆発させる改革策よりも、官民の調和をはかる、いわば政府寄りに近い保守的な意見に変わりつつあった。官民のけんかを誘発するよりも、その方が正論であるかもしれないが、急進派として急いで国会開設を望む藤田には

物足りない戸惑いがあった。その思惑が、酒の席でぐちとなつて表われていたのは事実である。

藤田は、「今こそ突進あるのみ」と堅く信じていた。だがこの時以来、福沢の前に出る時は、木綿を着用することにした。剛腹な藤田もよほど参つたらしい。

そんな時に、報知の社友は栗本御大の自邸に招待された。この頃、栗本鋤雲は、本所二葉町の旧友の邸を購入し、借紅園と名づけて悠悠自適の生活を送っていた。すでに五十八歳になっていた。

栗本は、藤田の顔を見るなり、

「福沢にやられたか」

と言つて笑つた。

藤田は「おやっ」と思ったが、箕浦が背中をつつくので、顔が赤くなるのを覚えながらじつと苦笑していた。

藤田はそれ以上何も言わない栗本が好きであった。

宴席はいつも和やかであった。社友達は、仕事を離れ御大を通してフランスの知識を吸収したり、維新に生きた経験談を聞くのが唯一つの楽しみであった。

―外から日本という国を見通せる政治家―

これが、いつも藤田のみる御大の印象であった。

栗本は現在のことを余り話さない。しかし、普仏戦争の終わったフランスについて、時折り暗示めいた話をした。それとなく現在の日本に当てはめて教導した。社友達は、御大のバリ見聞録が、ほろ酔い酒の肴として興味深く参考になった。

ナポレオンの話が出たり、ポリスの話があったり、フランス語の興味もあった。

「それにしても、貴公等は良い師をもってしあわせだ」  
栗本は皆の顔を見廻しながらとつとつと話す。

「居ながらにして外国を学べる時代になったが、外にばかり眼が向いても困る。維新の血を忘れてはならない。政府だ人民だといったところで、どちらもなければ国は成り立たん。けんかは一度でよい。西郷が教えてくれたではないか」

元幕臣の栗本の口から、西郷の名前を聞くだけで重味がある。

藤田は一瞬はっとした。

「そうか。西郷は死んで教訓を残した。福沢の官民調和もこれかもしれぬ。国会開設の朝野のけんかも、再び血

を流してはならんのだ」

藤田はそう思うと胸をうつものがあつた。そして、暑い夏を通して、議論風発した国会論がなつかしくもあつた。

報知の社説は、箕浦はおとなしく書き、藤田は短刀直入に書いた。しかし藤田のそのはげしさを、読者が一番喜ぶのを知っているのも栗本である。

「けんか腰はもういいではないか。同じ日本人がやることじゃ」

栗本はぼつりと言い切つた。

藤田は、御大の話を聞くと納得する。だが運動が始まると先頭に立ちたくなる。性分であつた。

宴席の間には、庭園を眺めて詩が出来る。

藤田は即興的に詩を詠んだ。

#### 借紅園雅集

名園の芍薬高人の菊

亦是れ当年五柳莊

李白桃花紅花過ぎし後

独り看る藍尾に真芳あるを

「借紅園」を陶淵明の「五柳莊」になぞらえ、栗本を最後に残る菊と賞讃し、藤田がいかに心酔していたかを物語る詩である。

藤田にとって、栗本と福沢は生涯の師であったが、その受けとめ方は多分に違っていた。福沢は学問的な師であり、栗本は人間形成の師であったかとも思われる。

だが、藤田は両師に影響されながらも、束縛されることなく、この先自由奔放に生きぬいている。

明治十年代の言論時代を、第二維新の建設期とするならば、藤田はやはり革命型に生まれ合わせた記者タイプといえよう。短命に終る藤田のことを考えると、自由奔放に生きる革命児にはやはり悲劇はつきもののである。

### 昭和六十二年主要予定行事・事業

- 一・一三 初あるき 川南（宗隣原供養塔―高鍋城跡（寒山拾得石像）―西都市（国分寺跡の木食彫刻仏像）―高城跡―佐伯

二・一 年頭役員会

下旬 佐伯史談第一四四号発行

三・上旬 特別委員会発足

中旬 講演会（御手洗一而氏）

下旬 毛利藩々政資料古文書講習会

四・上旬 訪問研修

中旬 古文書講習会

県内探訪研修会

五・下旬 古文書講習会

佐伯史談第一四五号発行

六・下旬 郡内探訪

七・上旬 古文書講習会

下旬 初益まいり

八・中旬 古文書講習会

九・下旬 古文書講習会

十・中旬 県外旅行事前研修会

下旬 県外旅行

一九 羽柴弘先生墓前祭

二〇・二五 佐伯氏位碑まつり

二一・上旬 年末集会